

秋田・羽後町

にしもない  
西馬音内盆踊

## “旅と俳句”

### 目次

小野の小町の里

小安峡

西馬音内盆踊(8月18日最終日)

川原毛地獄

三途の川



山形の阿部月山子さんのお世話で日本三大盆踊のひとつ秋田・西馬音内盆踊を見る機会があった。

平成十九年八月十八日



東京―新庄を山形新幹線で来て新庄駅から貸し切りバスに乗り換えて羽越街道を北上する。特別暑い夏であったが今日は暑さも一服した曇りの天気である。

金山杉で著名な金山を通過。音頭でこれまた有名な真室川などの杉材産地の山々を抜ける。生憎の雨になったが、道筋には青栗、えぞにうの花、木天蓼の白い葉、たらの木の花、葛の花、サルビア、いたどりの花、花令布など夏から秋に移り行かたはずまいを見せつゝ。

男郎花出しぬけに降る羽後の雨

棚山波朗

青栗を打つ山越えのにはか雨

阿部月山子

新涼や切り口揃ふ秋田杉

生江通子

### 小野小町の古里

道の駅おがちで休憩する。

ここは小野小町の生地と言われるところ。小町と深草少将の比翼塚がある。小町は十三歳で京へ出たというがこんな山深いとおるからどのように旅をしたのであろうか。

葛の花小町の里へ峠越え

臺田良雨

えぞにうや小町の里へ山雨急

飯田眞理子

湯沢市まで車を進めUターンして皆瀬川 雄物川の源流を遡り、稲庭で本場の稲庭うどんを賞味する。茹でたての上、出汁が利いていてなかなか美味い。またこの付近の川連（かわつれ）は川連漆器の産地。実用的な地味な漆器と見受けた。

雨にも拘わらず小安峡に行くと言つ。小安峡は栗駒国定公園のなかで大噴湯で有名であるという。鬼首などの間歇泉とどう違うのだろうか。峡谷を六十メートル降りてゆく。崖の法面の隙間から湯が噴出していたりして湯煙が太く立ち上つて

いる。なかなかの見ものであるが帰路の登りには膝が笑ってしました。



小安峡 大噴湯



四時半に「いこの村」宿舎に着く。五句出句のあと五時から夕食を取り六時にはいよいよ西馬音内盆踊見学へと出発。激しい雨の中を出発した一行は胸中不安でいっぱい。途中の集落の景色を眺めるが雨の景色ばかりで時折雨が途切れると平地の西馬音内は晴れているだろうかと祈る気持ちである。

「いこの村」は木地山高原にあり五十一号線を通って湯沢市を横切り三九八号線から羽後町の西馬音内へ行くバスで約一時間の旅である。平地に降りると雨雲が切れどつやう雨は降っていないようだ。

羽後町役場に大きな駐車場が用意されているがここから盆踊会場の本町通りへは歩いて十五分はかかる。バスの運転手さんは鶴岡の人で普段はお百姓をしているという。羽後交番に近い交叉点で我々を下ろしてくれて十時半に拾いに来てくれるという便宜を図ってくれた。

#### 小安峡 大噴湯の説明 ホームページより借用)

皆瀬川の急流が長年にわたり両岸を深く浸食してできた小安峡谷。岩づたいの階段を降りると、その先には遊歩道が続いています。「シューツ、シューツ。」大地の息吹を感じさせるように熱湯と蒸気が激しく噴出しているところが、小安峡一の名所、「大噴湯」です。

春は新緑、秋は紅葉。そして冬は峡谷に下がる大きなつらら「しがっこ」を楽しむことができます。

江戸時代の紀行家、菅江真澄もこの地を訪れ、「雷神のひびきのようなすごい音がして水がはじけるように湯が噴き出していた」と高松日記に記しています。



亡者踊の衣装

二万石橋を渡り本町通りの会場に着くと既に路上は見物人でいっぱいである。五百メートルはある大通りには棧敷がしつらえてあり満席になっている。我々は仕方なくかがり火広場にかかるつじて入り込み盆踊の始まるのを待つ。

大通りの商店二階の高さに作られたお隣子席から大太鼓、小太鼓、鉦、三味線、笛のお隣子が演奏されている。

七時開演。音頭が歌われそれに合わせて踊り子が踊りだす。進むかと思えば退き、退くかと思えば進むことを繰り返し、なかなか目の前に踊の列が現れない。深網笠に顔を隠し、色どりの端布を縫い合わせた着物姿の女性の踊り子。亡者をイメージした彦三頭巾を頭からすっぽりと被った女性や男の踊り手。それに幼い子供たちも混じって踊っている。

越中八尾の風の盆は未婚の踊り手と胡弓を主とした隣子、それに歌い手がしみじみと歌い踊る静かな盆踊であるが、西馬音内盆踊の踊の優美さは既婚の女性のかもし出す艶の所為かも知れぬ。





踊が一段落して



男の踊り手



雁の飛翔をイメージ? ガンケ踊



篝火を廻って踊る



笠を脱げば乙女

結局踊りを見て帰館したのは二十三時三十分であった。



踊り子と交歓



頭巾を脱げば乙女



親子

八月十九日(日)

午前七時朝食。八時から九時半まで句会。バスで川原毛地獄を見る。恐山と立山に並ぶ日本三大霊地である。硫黄の匂いで息苦しくなる。途中に泥湯温泉がある。



川原毛地獄をさして説明する阿部月山子

来た道を引き返して「いじいの村」の下にある「じゅんさい沼」を見る。じゅんさいの採取のシーズンはもう終わっていて静かである。水面にじゅんさいの細かな浮葉が覆い、中にじゅんさいの花がいくつか見える。可憐な花である。



じゅんさい沼



葉は直径5センチから10センチ

じゅんさいの花

は桃色で2センチほど

高松川沿いに道を下ると「三途川」という峡谷がある。



三途川の両端の関守(下流側 閻魔大王と禅次)



三途川展望所

三途川渓谷は、川原毛(かわらげ)地獄の入口にあります。この渓谷にかかると三途川橋は溪流から約40mの高さにあり、そこから下を眺めると、まさに断崖絶壁、「三途川」(冥土への路)と呼ばれるのも納得がいき、背筋に寒さを覚えるものがあります。橋の両端には、上りの方向には閻魔(えんま)大王、泰山(たいせん)大王が、下りには延命地蔵と合掌地蔵の4体の石像が鎮座しています。紅葉のころは絶景。その美しさに足のすくみも忘れて見入ってしまうそうです。ホームページよりの借用)

三途川に十王堂がある。閻魔大王ほか十王が祀られている。



十王堂縁下の蟻地獄と戯れる。静雄



帰路、再び「道の駅おがち」に寄る。  
沿道は稲が頭を垂れ始めていて豊作を予感させる。この集落には「鹿島さま」という守り神がいる。稲藁で作つてある。体長2メートル以上。「鹿島流し」という虫送りの行事もあるそうだ。



鹿島さま

秋田西馬音内盆踊り感想

前川みどり

富山の風の盆、岐阜の郡上踊と並び、近年人気の高い秋田西馬音内盆踊りへの吟行が実現した。西馬音内は横手盆地の南西にあたり、雄物川流域の穀倉地帯である。七百年もの間、踊り継がれているという盆踊りの魅力は野趣溢れるお囃子と幻想的ともいわれる優美な踊りにある。その衣裳が美しい。「端縫い衣裳」は数種類の

絹布をはぎ合せたもので黒い繻子の襟元から紅の半襟を覗かせる。黒地の繻子の帯をだらりの帯に結び、赤いしごきを巻いて左脇に垂らす。編笠を深く被り、顔は見せない。笠の紅い紐を結んだ顎とうなじだけが闇に白く浮かぶ。一同の目を引いたのは「彦三頭巾」姿。藍染めの浴衣に黒子のような長い覆面を被る。目の部分だけが開いていて、篝火に妖しく光る。その姿から亡者踊りと呼ばれる。大地を摺るように足を運び、流れるように踊り、よくしなる白い指先がひらひらと宙を舞う。

八月十八日、盆踊り最終日に合わせ山形新幹線で新庄へ。山形のメンバーと合流しマイクロバスで小野小町の生地、稲庭うどんの里、小安峽などに立ち寄りながら宿泊地、湯沢市「いこいの村」へ。盆踊りに備え早めにとった夕食で「みずの瘤」という山菜を戴く。晩秋、みずの節に出来る腋芽を塩蔵しておいた物で、煮浸しなどに料理する。歯触りの良い爽やかな食感だ。

午後六時、宿を出発、西馬音内へ。手入れの行き届いた杉山を抜け稲田の中を走る。途中の集落で守り神「鹿島様」に出会う。鬼を型取った巨大な藁人形で乳と臍の突起が目立つ愛嬌のある姿。「鹿島送り」という虫送りの行事もあるそうだ。

一時間程で西馬音内の町外れに到着、寄せ太鼓に導かれ、十五分程歩く。会場は本町通り商店街を東西三百メートルほど区切った狭い所で、篝火が随所に焚かれている。見物客は二重三重に会場を囲み、大きな櫓の上でお



囃子の一団が奏するのは秋田音頭に近く、秋田訛りの唄がテンポ良く、にぎやかに踊りを盛り上げる。

踊り初めは子供達とその母親で、母の後にびったりと就いて踊る姿が愛らしい。午後九時を過ぎると子供達は引き上げ、ここからが本番。頭巾を付けた男達が野太い合の手を入れながら亡者踊りに加わり、大きく闇が動く。女達はますます指先をしならせ、膝を落とし腰を廻す姿がなまめかしい。音頭の歌詞も艶めいた物になり、終盤に近付くにつれ、年配の手練も加わり、踊りが締まる。笛の音はここぞとばかり調子を上げて行く……。

踊りの輪抜けて水飲む亡者かな	棚山 波朗
飛ぶ雁の姿も羽後の踊かな	池内けい吾
母がゐて子がゐて長し踊の輪	臺目 良雨
鈍彫の十王佛や反魂草	阿部月山子
じゅん菜の沼のふちより草紅葉	生江 通子
砂撒いて亡者踊りとなりにつけり	柚口 満
白き手の亡者を招く踊かな	武田 禅次
彦三頭巾彼岸此岸の間を踊り	武田 孝子
稲の花鹿島様ある字境	飯田眞理子
闇を来て亡者踊に加はれり	倉林 美保

昔は月光と篝火の明りのみで、お囃子も太鼓と笛だけのシンプルなものだった。僅かな光の中で、影が動き、先祖の霊と一体になって踊る神秘的なものだったと聞く。

川原毛地獄を覗き、三途の川溪谷の橋の袂で閻魔大王に出会う。現世と黄泉の間を行き来した不思議な二日間だった。阿部月山子さんありがとうございました。

最後に小野の小町伝説をホームページから借用してこの吟行記を終る。

「平安の女流歌人・小野小町は、今から一二〇〇年程昔の八〇九年、出羽の国・福富荘・桐の木田（現在の湯沢市小野字桐木田）に生まれました。幼い頃から歌や踊りはもちろん、琴、書道となんでも上手にこなし、十三才の頃には都へのぼり、都の風習や教養を身につけました。

宮中に仕えるようになった小町は、その容姿の美しさと優れ、才能から多くの女官中、比類なしと称され、その歌は六歌仙、三十六歌仙に残っています。

しかし、故郷を恋しく思う気持ちは消えることなく、小町三十六才の時、宮中を退き、小野の里へと帰郷。庵を造って静かに歌を読み暮らしていたところ、小町を想う深草少将は、小町に会いたさから郡代職を願い出て、都から小野の里へとやってきたのです。

深草少将は、会いたい旨の恋文を小町へと送りましたが、小町はすぐに少将と会おうとせず、「わたしを心から慕ってくださるなら、高土手に毎日一株づつ芍薬を植えて百株にしてくださいませんか。約束通り百株になりましたら、あなたの御心にそいましょう」と、伝えました。

少将はこの返事をきいて野山から芍薬を掘り取らせ、植え続けました。一株づつ植えては帰っていく毎日。実は小町は、この頃疱瘡を患っていたのです。百夜のうちに疱瘡も治るだろうと、磯前(いそざき)神社の清水で顔を洗い、早く治るよう祈っていました。深草少将は一日も欠かすことなく九十九本の芍薬を植え続けました。いよいよ百日目の夜。この日は秋雨が降り続いたあとで、川にかかった柴で編んだ橋はひどく濡れていました。

「今日でいよいよ百本」。小町と会える日がきたと喜び、従者がとめるのもきかず、少将は「百夜通いの誓いを果たす」と、通い慣れた道を百本目の芍薬をもって出かけました。

しかし、少将は橋ごと流され、不幸にも亡くなってしまったのです。小町は深い悲しみに暮れ、少将の亡骸を森子山(現在の二ツ森)に葬ると、供養の地藏菩薩を作り向野寺に安置し、芍薬には九十九首の歌を捧げました。少将の仮の宿だった長鮮寺には板碑を建て回向し、その後岩屋堂に住んだ小町は、世を避け自像を刻んで、九十二才で亡くなったといわれます。

いつとなく かへさはやなん かりの身の

いつつのいろも かはりゆくなり

小町辞世の歌



旅姿(市女笠)の小町(ホームページから)

みちのくのここ西馬音内夏火桶

月光に簪に顔のなき踊

高野素十

西本一都

参加者は東京から棚山波朗、池内けい吾、墓田良雨、柚口満、武田禅次、山崎赤秋、唐沢静男、中島八起、伊藤洋、飯田貢一、生江通子、前川みどり、武田孝子、飯田眞理子、萩原まさ子、倉林美保。山形から阿部月山子、工藤竹治、成沢慶子、高宮須美子の諸氏である。

写真作成 墓田良雨